

《エイズ啓発キャンペーンのテーマ策定のための参考資料 エイズ対策この1年》

議論の相伴に、HIV/エイズ分野でこの1年ほどに起きた出来事を11項目、ピックアップしてみました。

宮田 一雄

- ・ 米国で22年ぶり国際エイズ会議 ワシントン DC 宣言が公式宣言に
- ・ 世界銀行新総裁にジム・ヨン・キム氏
- ・ FDA がツルバダを曝露前予防投与薬として承認
- ・ 戦略研究→予防指針→そして・・・
- ・ エイズの時代のミュージカル「RENT」東京公演
- ・ ピーター・ピオット前 UNAIDS 事務局長が日本エイズ学会で演説
- ・ 「エイズから自由な世代」とは
- ・ 世界エイズ・結核・マラリア対策基金10周年
- ・ 総選挙でも見事なまでに注目されなかったエイズ対策、各党の姿勢は？
- ・ 新生児の「機能的治癒」を報告
- ・ 日本発のエイズワクチン候補 臨床試験開始

【米国で22年ぶり国際エイズ会議 ワシントン DC 宣言が公式宣言に】

「Turning the Tide Together (力を合わせて流れを変えよう)」をテーマにした第19回国際エイズ会議(AIDS2012)が2012年7月22日から6日間、米国の首都ワシントンで開かれた。米国ではHIV陽性者の入国規制政策が続いていたため、1990年の第6回(サンフランシスコ)を最後に国際エイズ会議が開けないでいたが、2年前にその規制が撤廃され、22年ぶりの会議開催が可能になった。会議には2万3767人が参加。国際エイズ学会(IAS)と米カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)から「エイズの流行の終わりの始まり」を強調するワシントン DC 宣言が発表され、会議の公式宣言として採用された。

【世界銀行新総裁にジム・ヨン・キム氏】

抗レトロウイルス治療普及のための3by5計画の推進者として知られるジム・ヨン・キム氏(ダートマス大学学長)が7月1日、世界銀行の新総裁に就任。第19回国際エイズ会議開会式で行ったキム氏の演説「エイズの流行と貧困に終わりを」はこの30年のエイズ対策の歴史を振り返り、常にエイズアクティビストたちがHIV/エイズ対策を切り開いてきたことを強調して大きな拍手を受けた。

【FDA がツルバダを曝露前予防投与薬として承認】

米食品医薬品局（FDA）が 7 月 16 日、抗レトロウイルス薬のツルバダを HIV 感染の予防薬として承認。抗レトロウイルス薬が HIV に感染していない人の曝露前予防（PrEP）目的で承認されたのは初めて。製薬会社ギリアドの申請を受け、FDA の抗ウイルス薬諮問委員会が 5 月 10 日、承認を勧告したが、審議は 8 時間半におよび、かなり議論は分かれた。FDA は副作用のモニターなどの検討を慎重に続け、2 カ月後に承認の結論を出した。

【戦略研究→予防指針→そして・・・】

1999 年 4 月に施行された感染症法（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律）に基づくエイズ予防指針の 2 度目の見直し作業を経て、2012 年 1 月 19 日に新たな改正指針が告示された。8 月に日本記者クラブで記者会見を行ったエイズ予防財団の木村哲理事長（エイズ予防指針作業班班長）は、改正のポイントとして、治療の進歩を踏まえた検査相談体制の充実や行政・NGO・研究者の連携の重要性などを強調した。

また、見直しの背景として、2006 年から 5 年間にわたるエイズ予防の戦略研究にも言及。首都圏のゲイコミュニティで研究者とコミュニティ当事者が協力して多様な予防啓発活動に取り組み、安心して検査を受けられる環境を整えていった努力がエイズ患者報告数の減少などの成果につながったことを評価した。エイズ予防財団が《NGO・行政・研究者間の連携》を推進するためのプラットフォーム的役割を目指すことにも意欲を示した。

【エイズの時代のミュージカル「RENT」東京公演】

ミュージカル「RENT」の新演出版が 10 月 30 日から 12 月 2 日まで日本のキャストにより東京・有楽町のシアタークリエで上演された。エイズの影響を大きく受けた 1991～92 年の NY を舞台に若い芸術家たちの姿を描き、96 年度トニー賞、ピューリッツァー賞を受賞。96 年の初演以来ブロードウェイで 12 年 4 か月のロングランを記録し、さらに世界 15 カ国で各国版が上演されている。東京公演では 11 月 20 日～25 日の LGBT Pride Week（協力：アルファ ロメオ）に様々なイベントが企画された。

【ピーター・ピオット前 UNAIDS 事務局長が日本エイズ学会で演説】

横浜市港北区の慶應義塾大学日吉キャンパスで開かれた第 26 回日本エイズ学会初日の 11 月 24 日、国連合同エイズ計画（UNAIDS）のピーター・ピオット前事務局長が過去 30 年のエイズ対策を総括する講演を行った。UNAIDS 推計では、世界の HIV 陽性者数は 3400 万人に達し、エイズで亡くなった人を含めるとこの 30 年余りに HIV に感染した人の数は 6000 万人を超えている。ピオット博士は、エイズのパンデミックについて、（1）保健分野だけでなく広い視野で政治や政策をとらえる、（2）セックスやドラッグと関連した社会的な偏見や差別への対応が予防や治療の普及を進めるうえで重要、（3）ゲイコミュニティから始まったアクティビズムがエイズ対策を進める大きな原動力になった一と述べた。

また、治療の普及について「途上国で抗レトロウイルス治療を受けている HIV 陽性者は 2011 年末時点で 800 万人に達し、10 年前は 20 万人以下だったことを考えると大きな成果」と語った。ただし、抗レトロウイルス治療が緊急に必要な HIV 陽性者は約 1500 万人と推計され、現状はそのほぼ半数がようやく治療を受けている状態。ピオット氏は「終わりの始まりなどといえる状態ではなく、AIDS Goes on と考える方が正しい」と指摘し、「エイズとの闘いは短期的対応から、長期的な対応へと移っていく」との認識を示した。

【「エイズから自由な世代」とは】

ヒラリー・クリントン米国务長官が 11 月 29 日、ワシントン DC で AIDS Free Generation (エイズから自由な世代) を実現するための「青写真」《PEPFAR Blueprint: Creating an AIDS-free Generation》を発表。《エイズから自由な世代》は前年の 11 月 8 日にクリントン長官が米国のエイズ対策について演説した際に重要な政策目標として初登場。要約すると、次のような状態の実現を目指している。

- (1) すべての赤ちゃんが HIV に感染することなく生まれ、
- (2) 様々な予防手段により 10 代や成人してからも現在よりはるかに感染リスクが低く、
- (3) 感染したとしても、エイズ発症と他の人への感染を防ぐことができるよう治療へのアクセスが得られる。

つまり、目指すところは「エイズから自由な世代」であって、HIV に感染している人が一人もいないという意味での「エイズのない世代」ではない。

【世界エイズ・結核・マラリア対策基金 10 周年】

2002 年に発足した世界エイズ・結核・マラリア対策基金（世界基金）が創立 10 周年を迎え、世界基金支援日本委員会のサイトの 10 周年ページに関係者の証言やショートフィルムが紹介されている。10 周年は世界基金にとって組織改革の観点からも節目の年となり、3 月にミシェル・カザツキン事務局長が辞任。理事会は公募を経て 11 月 15 日、マーク・ダイブル氏（元米地球規模エイズ調整官）を新事務局長に選任した。2004 年の世界基金支援日本委員会設立以来、委員会を主導してこられた山本正ディレクター（日本国際交流センター理事長）が 4 月 15 日に逝去。山本さんの多大な貢献に感謝するとともにご冥福をお祈りします。

【総選挙でも見事なまでに注目されなかったエイズ対策、各党の姿勢は？】

12 月 16 日の総選挙投開票を前に日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラスが各政党に対し、エイズ対策に関する公開質問を送付。回答を公式サイトで公表した。

【新生児の「機能的治癒」を報告】

HIV に感染した新生児に生後 30 時間から抗レトロウイルス治療を開始した結果、現在 2

歳半の赤ちゃんが「機能的治癒」を実現しているとする研究報告が3月4日、米・アトランタで開かれたレトロウイルス・日和見感染症学会（CROI）で発表された。

現在の抗レトロウイルス治療では、ウイルスを検出限界以下にまで減らすことは可能だが、治療を止めれば体内の HIV 量がまた増えるので、治療を始めた人は薬を飲み続ける必要がある。治療を止めても体内の HIV が検出限界以下のまま増えない状態は「機能的治癒」ないしは「機能的完治」と呼ばれ、今回の発表はその実現例として注目を集めた。ただし、この一例で一足飛びに完治への道が開かれたわけではなく、国際エイズ学会（IAS）のフランソワーズ・バレシヌシ理事長は英紙タイムズに《HIV 完治の実現は遠い先の話である。しかし、注目していかなければならない》とする論評を発表。希望を失うことなく、過度な楽観もせず、研究を続けていかなければならない・・・と現状をとらえている。

【日本発のエイズワクチン候補 臨床試験開始】

国際エイズワクチン構想（IAVI）と茨城県つくば市に本社を置く医学分野のベンチャー企業・ディナベック社が4月1日、日本で開発されたエイズワクチン候補の第1相臨床試験の開始を発表した。英国、および東部アフリカ地域で臨床試験が始まっているという。

第1相は主に安全性を確認する比較的、小規模な臨床試験。動物実験で有望とされたワクチン候補が実際にワクチンとして使用可能になり、HIV 感染予防に効果を発揮できるかどうかはまだ分からない。安全性を確かめ、人の体内で HIV に対する免疫を誘導することを確認し、広く感染を防止する効果があることを大規模試験で確かめる必要がある。今回のワクチン候補の開発は、センダイウイルスベクターを使った新しい技術を駆使し、ディナベック社と国立感染症研究所、東京大学医科学研究所が共同研究を進めてきたという。